

保育者養成校における野外活動実習の効果について

菊池 理恵
野田 さとみ

1. はじめに

現代社会を生きる青少年は多岐にわたる課題や問題点をかかえている。例えば、国立青少年教育振興機構(2010)によると代表的な問題として、生活習慣が身につけていない、対人関係が希薄で異年齢や異世代との交流がない、自然体験等の不足、コミュニケーション能力の低下、体力の低下などがあげられている。ここでは、上記の問題を解決するために必要なこととして生活体験や社会体験、自然体験の機会を増やすことが重要であると指摘している。

保育者養成校の学生についても、同じことが言える。保育者養成校の使命は、質の高い保育者の育成にある。幅広い指導が可能な保育者となるために、自然体験などの直接体験を伴ったプログラムは欠かすことができない。本校では、そのような観点から、学生に野外において自然体験やグループワークなどの直接体験を伴った学習が可能な野外活動実習を実施してきた。

保育士養成校での自然体験や野外活動についての研究に関しては、これまでもいくつか見られる。例えば、高野(2011)は、自然体験の多い学生は、将来保育者になったときにより積極的に自然教育に関わる可能性を指摘している。また自然について学ぶために保育や授業で活用できるプログラムの一つにネイチャーゲームがある。後藤(2004)は、学生が幼児向けのネイチャーゲームプログラムに関わることで、幼児についての理解や保育者としての対応の仕方を学ぶ経験につながることを指摘している。また白石ら(2016)は、自然学校「森のようちえん」に学生がスタッフとして参加した結果、子どもへの関わり方が変化したことを報告している。前迫(2006)も、保育者養成校が自然への興味と実践力を身につけた保育士を養成することの必要性を指摘し、そのためには学生が在学中に野外学習や自然体験活動の経験

をすべきとしている。

これらの研究が指摘するように、保育者養成校の野外体験は、将来保育士としての資質や指導のあり方に大きく影響を及ぼすと考えられる。つまり、学生が五感を使った自然理解や野外活動を経験することは、子どもたちにその経験を直接伝える基礎を成すものといえよう。

そこで本研究では、野外活動実習に参加する学生が実習経験からどのような効果を得ているのかについて検討する。具体的には、野外活動実習プログラムに参加する学生の意識が、実習前(事前)と実習後(事後)においてどのように変化するのか検証することを目的とする。

2. 研究方法

(1) 調査対象者

本学1年次「スポーツとエクササイズ」(前期)履修者106名を調査対象者とした。分析は、意識調査に回答を得られた99名とした。(男性1名、女性98名)

(2) 実習実施場所

名古屋市東山動植物園(名古屋市千種区)で行った。この公園は、動物園と植物園を併設しており、都市公園でありながら自然環境に恵まれ、多くの幼稚園や保育園の遠足の目的地となっている。

(3) 調査の流れ

野外活動実習は事前の説明、意識調査、活動の実施の流れで行った。その詳細は表1の通りである。

(4) 課題内容

当日、現地で行う課題は、個人課題とグループ課題の二種類である。課題の内容については表2の通りである。

保育者養成校における野外活動実習の効果について

表1 事前調査から事後調査までの流れ

日付と時間	活動内容
4月8日(金)	授業時に学生に野外活動実習について説明を行う
5月6日(金)	事前の意識調査を配布、回収を行う 実習直前のオリエンテーションを行う (実施要項の説明、課題用紙の配布、チケットと地図の配布) (話し合いによる3人から6人のグループ分け、グループ活動を行う)
5月7日(土) 10:00 10:10 12:00 14:30	現地集合(点呼、グループ課題の配布と確認) 活動開始 活動中グループごとに昼食 グループごとに個人課題、グループ課題を提出し、写真撮影して解散
5月13日(金)	授業開始時に事後のアンケート調査を配布・回収を行う

表2 野外実習での課題と内容

課題	内容
動物園見学のプログラム作り	引率者として遠足の下見に来園したという前提のもと、遠足当日の流れについてプログラムを作成した(個人課題)
動物のスケッチ	グループにて動物を1種類選定し、解説を入れてスケッチをした(個人課題)
ネイチャーゲーム*	「目隠し歩きと裸足歩き」、「サウンドマップ」、「マイクロハイク」の3題を行った(個人課題)
歩数計測	各自携帯電話の歩数計アプリを活用し、(実習当日)自宅出発時から課題提出時までの歩数を計測した(個人課題)
クイズラリー	動物園内を巡りながら、設定されたクイズ問題(8問)に解答した(グループ課題)

*当該実習で実施したネイチャーゲームは、1979年米国のナチュラリスト、ジョセフ・コーネル氏が提唱した野外活動プログラムに基づいている。これは五感を使って自然との触れ合いを強調するものであり、特別な知識や技術をもたなくても、自然との一体感を得ることのできる活動である。

(5) 調査内容

野外活動実習は、学外において自然豊かな環境で実施することを目的とした。実習のねらい(目的)に沿って、意識調査の質問項目を、「自然に対する意識」「コミュニケーション」「保育者意識」「運動意識」の4側面から捉えることとし各側面それぞれ3項目(全12項目)から構成した(表3の通り)。なお、実習のねらい(目的)は、以下の4点であった。

- 保育者の視点から動植物園を理解する。
- 野外において五感を使って自然を理解する。
- グループ活動を通して仲間と協力することができる。
- 公園内を歩き、運動について意識する。

表3 意識調査項目

課題領域	課題関連項目
自然に対する意識	普段から五感を使って自然を感じることがある
	動物について興味・関心がある
	植物について興味・関心がある
コミュニケーション意識	友人とはいつもコミュニケーションをとっている
	友人との話し合いでは自分の意見を述べるほうだ
	何人かで問題解決をするときは積極的に関わるほうだ
保育者意識	将来保育者になることを意識している
	普段から指導をする観点から物事をとらえている
	子どもの行動に興味・関心がある
運動意識	普段から歩き方(歩く姿勢)に気をつけている
	ダイエットについて興味・関心がある
	普段から運動することを心掛けている

各設問項目については、「非常に当てはまる」(6点)「当てはまる」(5点)「やや当てはまる」(4点)「あまり当てはまらない」(3点)「当てはまらない」(2点)「全く当てはまらない」(1点)までの6段階尺度で、その当てはまり具合を尋ねるように設計した。また、得られた回答は、それぞれが1点か

ら 6 点までの間隔尺度を構成するものと仮定し、分析を行った。

(6) データの分析

収集したデータは、クリーニング後、入力作業を経て単純集計を行った。また事前・事後の項目については対応のあるサンプルの t 検定を行った。統計的な有意水準は 5% に設定した。また、事後調査で得た自由記述による学生の感想については、キーワードを抜き出して、その出現頻度を記録した。データの加工および統計処理には IBM SPSS Statistics 19 を用いた。

3. 結果と考察

(1) 調査対象者のプロフィール

回答者 99 名のうち、調査時まで自然体験活動を行ったことがある学生は 84 名 (85%) であった。また実習地である東山動植物園への来園経験を尋ねると、動物園に来たことがある者は 95 名 (96%) で、植物園に来たことがある者は 49 名 (49%) であった。動物園と植物園が併設されているが、動物園に比べて植物園への来園経験は少なかった。

大学入学前の運動部活動経験については、中学時代に運動部だった学生が 55 名 (56%) であった。また高校時代に運動部に所属していた者は 36 名 (36%) であった。

(2) 実習に関する意識とその変化

表 4 は、実習課題に関わる学生の意識について尺度を用いて数量的に把握した結果で、事前と事後のスコア (平均値) を比較したものである。

まず事前の意識スコアをみると、相対的にスコア値が高い項目と低い項目があることが分かる。相対的に高いのは、「子どもの行動に興味・に関心がある」(5.33)、「将来保育者になることを意識している」(5.16)、「友人といつもコミュニケーションをとっている」(5.16) という項目で、これらのスコア平均値は 6 点満点中の 5 点台 (レンジは 1~6) にあった。一方、スコアが相対的に低かったのは、「普段から五感を使って自然を感じる」(3.51)、「植物について興味・関心がある」(3.56)、「普段から歩きかたに気をつけている」(3.66)、「普段から運動することを

表 4 意識調査結果

課題関連項目	事前事後平均値と差		
	事前	事後	差
①五感意識	3.51	3.68	0.17*
②動物関心	4.45	4.53	0.08
③植物関心	3.56	3.71	0.15*
④友人とコミュニケーション	5.16	5.12	-0.04
⑤話し合いで意見	4.37	4.29	-0.08
⑥問題解の関わり	4.09	4.02	-0.07
⑦将来保育者意識	5.16	5.05	-0.11
⑧普段から指導者意識	3.78	3.89	0.11
⑨子どもも興味関心	5.33	5.27	-0.06
⑩歩く姿勢	3.66	3.7	0.04
⑪ダイエット興味関心	4.55	4.54	-0.01
⑫運動意識	3.62	3.65	0.03

* 5%水準で有意 (対応の t 検定)

心がけている」(3.62) などの項目で、これらに関してはスコア平均値が 6 点満点中 3 点台にあった。事前スコアのこれらの結果から、事前つまり普段の学生の意識は、保育者意識や友人とのコミュニケーションに関しては比較的に高い傾向にあるが、自然に対する意識や運動意識については低い傾向にあることが明らかになった。

次に、事後調査の結果を見る。事後調査の結果よりスコア値が上昇したのは、12項目 6 項目であった。このうち、「普段から五感について自然を感じる」(3.51)と「植物について関心がある」という 2 項目については、対応のある t 検定を行った結果、それぞれ事前事後のスコアに有意な差が認められた。これら以外のその他の項目については、スコア値が僅かに下降したのものもあるが、全体として事前事後のスコア値に大きな変化はみられなかった。今回の事前調査で相対的に低い値を示していた自然に対する意識 (スコア) が、事後調査において高くなったといえることができる。

本研究の目的は、野外活動実習の前後においての学生の意識がどのように変化したか検証することであった。今回の調査の結果からいくつかの興味深い点が得られた。

まず、事前の調査では、「保育者意識」に関する項目が他の項目と比べて相対的に高い値を示していた。これは、今回の調査が学生の入学時から

表5 自由記述のキーワード

キーワード	頻度
動物園	47
自然とのふれあい	38
グループコミュニケーション	26
植物園	18
疲れた	17
保育者	14
子ども観察	11
達成感	10
歩くのが大変	9
時間が足りない	5
シャバーニ	3
再来園希望	3
大人になっての来園	2

あまり時間が経過していない時期に実施されたことと無関係でないかもしれない。つまり、学生は将来就きたい職業として保育士という明確な目標をもって入学してきており、調査が学生の意識や気持ちが新たな時期に行われたといえる。そのため比較的高い値が記録されたと考えられる。

次に、「自然に対する意識」や「運動意識」に関する項目が比較的低かった点があげられる。「自然に対する意識」が低かったことは、一般的に指摘されている現代の若者の自然体験の少なさや意識の低さ（国立青少年教育振興機構 2010）と同一線上にあることを意味しているのかもしれない。また本校の立地も関係しているのかもしれない。本学は市内の比較的都市部にあり、周囲の自然環境が多くない状況も影響している可能性がある。今後、自然についての意識を喚起するプログラムを提供することにより、学生の自然に対する意識も向上することも考えられる。

また「運動意識」が比較的少なかったのは、普段から運動習慣をもっている者が少ないからだと思われる。「スポーツとエクササイズ」の授業開始時に、普段から運動習慣を持っているか尋ねてみたところ、殆どの学生が運動習慣を持ってなかった。今後、「運動意識」について授業等において喚起できるよう働きかけていくことが必要といえよう。

(3) 自由記述による感想の集計について

事後調査においては学生たちの経験について率直な意見を尋ねるために自由記述欄を設けた。ここでは、自由記述の内容を抽出したキーワードから分析した。

自由記述キーワードの出現度数を集計すると、「動物園」「自然とのふれあい」「グループコミュニケーション」などのキーワードが多くを占めた。(表5)。

具体的には、動物園については、幼少の頃に遠足で来園してきた以来、久しぶりに来たという学生も多く、「展示動物をじっくり観察することも初めての体験であった」「動物園が広く感じる」といった感想を述べていた。今回の実習で来園したことは、新たな感覚で活動できたと思われる。自然とのふれあいに関するものは、「自然のなかの体験は新鮮であった」「自然の中にいることで

普段感じることのできないことを体験できた」と述べている者もいた。ネイチャーゲームで得られた感覚が、直接感想のことばとなったであろうと窺える。グループコミュニケーションについては、「友人と、より親しくなった」「あまり話をしたことがなかった子とグループ課題でいろいろ話ができてよかった」と述べられていた。グループ活動においては、活発な意見交換が行われていたと見受けられた。

自由記述回答には、意識調査の項目である12項目に関する内容も触れられていたが、それ以外の直接的な体験や感想の記述も多くみられた。つまり、意識調査の項目だけでは回答を得られなかった内容が自由記述の感想に述べられていたと言える。

実習後の自由記述の感想については、調査項目関係するものに加えて、様々な学生自身の変化や体験や感情、心情が述べられていた。記述には、「五感を使うことの意識ができた」「自然とふれあうことがじっくりできた」など学生にとってインパクトになったと思われる言葉が見受けられた。これらのことから、学生たちは実習からそれなりに実習体験から得るものが多かったのではないかとと思われる。このような点をふまえて、今後は尺度項目の設定等を検討していくべきと考える。

(4) 意識調査と自由記述の結果から

大きく意識変化がみられなかった理由は、プロ

グラム内容が意識を変化させるところまでインパクトがあり妥当な内容だったかどうかという点である。しかしこの点については、自由記述での学生たちの感想から判断すると大きな要因になっているとは考えにくい。むしろデータ収集の仕方などの影響が大きいと考えられる。

その一つにワーディングの問題があるかもしれない。今回の調査では、事前と事後の設問で全く同じワーディングを使用していた。設問文には「普段から」という言葉が入っているために、事前事後に関わらずより一般的な考えが回答に反映したのではないと思われる。今後の調査においては、過去形の問いかけにするなどワーディングに工夫することが必要と考える。

また、事後調査のタイミングについても検討が必要と思われる。今回は、事後の調査を実習6日後に実施した。そのため、活動自体の印象も薄れてしまったのではないかと推察される。事後調査を実習直後か、より早い時期に実施する必要があると考えられる。

4. 今後の検討課題とその変化

本研究は、野外活動実習における参加学生の意識について、実習前後の変化を明らかにするものであった。すでに述べたように、意識項目の数値については、一部を除いて大きな変化は観察されなかった。しかしながら自由記述の分析では、野外活動の参加が学生の意識にそれなりの効果をもたらしたことが推察された。このことから、実習についてこれからも実施する意義はあるといえる。

今回は野外活動実習について一定の評価を得られた。しかしながら、一方で課題も明らかになった。今後はプログラム内容の検討や質問紙の項目など検討し、更にこれからよいプログラムなるよう改良を重ねたい。秋季に同じ科目の同学年の学生に授業が実施されるので、次回は改良をした質

問紙で調査を実施する予定である。

今回の野外活動実習を通して、改めて学生達がより主体的に自然体験などに関わっていくことができるプログラムが必要であることが明らかとなった。活動内容についてさらに考慮して、学生達の意識変化が大きく変化することのできる課題を検討していきたいと考える。

参考文献

- 国立青少年教育振興機構(2010) 自然体験活動指導者養成テキスト
文部科学省(2008) 幼稚園教育要領解説 フレーベル館
高野牧子他(2011) 保育者養成における野外教育 山梨県立大学人間福祉学部紀要 Vol.6 pp.15-20
白石昌子他(2016)「森のようちえん」への参加が学生に及ぼす教育的効果 人間発達文化学類論集 第23号 pp.21-41
後藤範子(2004) 保育者養成におけるネイチャーゲームの可能性について 国際学院埼玉短期大学研究紀要 Vol.25 pp.13-21
前迫ゆり(2006) 環境領域の保育活動と保育士養成校における自然環境教育 奈良佐保短期大学紀要 第14号 pp.63-81
能條 歩(2015) 人と自然をつなぐ教育 自然体験教育入門 NPO 法人北海道自然体験活動サポートセンター
井上美智子他(2010) むすんでみよう子どもと自然 保育現場での環境教育実践ガイド 北大路書房
ジョセフ・B・コーネル(2000) ネイチャーゲーム(1) 柏書房(改訂増補版)
日置 光久他(2012) 子どもと自然とネイチャーゲーム 保育と授業に活かす自然体験(Nature game books 先生のための実践書シリーズ) 日本ネイチャーゲーム協会

A Study on Effect of the Outdoor Activities Program in Early Childhood Education

Kikuchi, Rie*

Noda, Satomi*

本研究では、保育者養成校における野外活動実習に焦点を当て、参加学生にどのような意識の変化がみられるのかを検討することを目的とした。具体的には、実習プログラムに関して学生の意識が、実習前（事前）と実習後（事後）においてどのように変化するかを検証した。対象者は保育者養成コース1年次授業履修者106名で、うち有効回答数は99名であった。学生の意識は、実習目的に沿って4側面12項目で量的に把握することとし、実習前後で質問紙による調査を行なった。尚、事後調査においては学生の率直な感想を得るための自由記述回答を追加した。実習目的に関連する項目については、事前事後でのスコア平均値を比較し、実後の自由記述についてはそれぞれの記述からキーワードを抽出し、その発現頻度をカウントした。分析の結果、実習目的に関連する項目については、12項目中2項目にのみ変化がみられた。「五感の活用」と「自然を意識する」項目に関して、実習後で学生の意識が高くなった（5%水準で有意）。その他の項目については、殆ど変化は見られなかった。一方、事後の自由記述（感想）の分析からは、多くのキーワードが抽出され、学生が実習から多くの経験と感動を得たことを伺わせた。自由記述の回答は、尺度による量的な分析結果を補完する働きがあることを推察される。意識調査と自由記述の結果より野外活動実習は、保育者養成校の学生にとって効果あったと推測される。

キーワード：保育者養成校 野外活動実習 自然体験 意識変化